

1. 主題名 「主将とエースの冷戦」 【内容項目 B一(8) 友情・信頼】

2. 資料名 「箱根0区を駆ける者たち」

### 3. 指導にあたって

#### (1) 生徒について

本学級の生徒たちは、この一年間様々な活動を通して学級としての団結を深めてきた。友人を大切に思う心や協力する姿勢など、思いやりの精神は根底にある。しかし、友人同士で互いの評価を気にする様子が見られ、自分の思いや考えを素直に表現できていない生徒も多い。これには、自分の思いや考えが否定されることで心が傷つくことを恐れていることや互いに本音を語ることのできる「心腹の友」という関係性が少ないことがあると考える。

生徒たちは出身地域も様々であり、部活動においては外部で個別に活動している生徒もいるため、学校生活の中で自分のことをよく理解し、心から通じ合える友人を求めているように感じる。

今後ますます情報化社会が広がりを見せ、人間同士のつながりが複雑化していく中、心から信頼でき、一生涯大切にしていきたいと思える友人に出会うことが人生を豊かにすると考える。そのために、自分にとって友人とはどのようなものなのかを改めて見つめ直すとともに友人をより一層大切にしていく心情を養いたい。

#### (2) 主題に対する教師の考えとねらいとする価値について

本資料は、内容項目B一(8)「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと」に重点を置いた指導をする。特に新学習指導要領の解説にある「相手の内面的なよさに目を向け、相手の成長を心から願って互いに励まし合い、忠告し合える信頼関係のよさを味わわせる」という部分を主なねらいとする。本題材における「友情・信頼」は、互いに高みを目指すために忠告し合い、険悪なムードになりながらも、根底には相手のよさを認め、信頼し合っているという部分であると考え。改めて「友人」の定義を考えることで、様々な友人の捉え方があることに気付いたり、互いに高め合えたりする友情を築こうとする道徳的心情を養うことになると考え、この主題に設定した。

#### (3) 資料のあらすじ

「箱根0区を駆ける者たち」は2018年の箱根駅伝で優勝候補であった東海大学駅伝部のストーリーを綴ったものである。この中の「主将とエースの冷戦」を資料として扱う。

本資料は東海大学駅伝部の4年生であり主将の春日選手と、同じく4年生でエースの川端選手のこれまでの歩みが記されている。主将の春日選手は、元々は川端選手と同じように、自分のことだけに集中して、他人に干渉されたくないタイプであった。しかし、主将という立場になったため、自ら嫌われ役を買ってでて、チームの規律を重んじるよう徹底

して正義を押し通した。一方川端選手は、自分の力を伸ばすことが一番で、周りのことはお構いなしの性格である。そんな2人は様々な出来事でケンカが絶えず、徐々に関わりをもたなくなっていく。チームに大きな影響力のある主力の2人だけに、チーム全体が気を遣うほど2人の冷戦は深刻なものであった。主将の春日選手は、チーム運営の件で川端選手に歩み寄ろうとしたがこれを拒否され、結局箱根駅伝当日まで和解することはなかった。しかし、川端選手は引退後このように語っている。  
「春日とはケンカをたくさんした分、これで仲良くなれば相当、深い友人になれる。いつになるかわからないけどね」

#### (4) 目指す生徒像に近づけるために

##### ①本題材で目指す生徒像

本題材での授業における資質・能力を発揮している生徒の姿を、以下のように考えている。

様々な友人の捉え方があることに気付き、互いに支え合い、高め合える友情を築いていこうとする生徒

「特別の教科 道徳」では、3年間を通じて「道徳的価値について誠実に向き合い、物事を多面的・多角的に考えながら、人間としてのよりよい生き方・考え方を追究し続ける生徒」を育てたいと考えている。そのために本年次は、「それぞれの立場から考えたときに何が問題となっているのか」などについて自ら教材に立ち返ったり想像したりしながら再思考し、友人像について考えさせていきたい。

本題材では、「友情と信頼」という内容項目の中で、春日選手と川端選手の関係を通して、友人の捉え方にも様々なことに気付かせたい。そして、今後更に広がる生徒の友人関係で、自分が心から信頼できる友人とはどのような存在なのか、友人と呼べる人に対し自分はどのような接し方をすべきなのかを考えさせることで、友情と信頼についての道徳的価値に迫れるようにしていきたい。

この題材で出てくる主将とエースの関係は、周囲にまで気を遣わせるほど険悪な関係でありながらも、最後には「深い友人になれる」と語っている。その背景には、相手のよさや苦悩を理解しており、お互いの存在を認め合っていることがあると考える。自分にとって一生涯大切にしたいと思える「深い友人」とはどのような存在の人なのかを、本題材に出てくる「深い友人になれる」という発言の真意に迫ることで、道徳的心情を養うことに繋げたい。

##### ②手立て

生徒たちに自分自身と比較をしながら友情と信頼について向き合わせるために、以下の点を手立てとする。

- ・様々な友人関係があるものの、同じ目標に向け心を繋ぐ友情に触れさせるために、学生駅伝についての資料を扱う。
- ・自分自身の友人像を見つめさせるために、登場人物を通して友人関係を考えさせる。その際、多様な考え方から様々な友人の捉え方に気付かせる。

【資料分析図】

	内容	考え・心情	価値	発問の意図	主な発問
資料	箱根駅伝優勝に向け、選手それぞれの思いが葛藤、衝突する。	主将はチームのために正しいと思うことを指示するが、エースは自分のことを一番に考え主将を受け入れられない。	<div style="border: 2px solid black; padding: 10px; display: inline-block;">                     友情・信頼                 </div>	いつも仲良く一緒にいることだけが友人ではないことや、本音を言い合える関係だから友人であるという訳でもないこと等、自分自身の理想の友人像に迫るとともに自分が友情を構築するうえで大切にすべき道徳的な心情を養いたい。	最後にエースは「深い友人」になれると語っているが、なぜそう思ったのでしょうか。
	主将とエースの険悪な関係が深刻化し、チーム全体に悪影響を及ぼす。				
	主将の怪我に対し、内心心配をするエースであったが、結局主将の歩み寄りにも応じず、最後まで険悪な関係が雪解けを迎えることはなかった。	主将の存在はチームに欠かせないものと認めてはいるものの、深まった溝は簡単に埋められないエース。			
	箱根駅伝が終了し、引退の日を迎えたエースは、これまで散々ケンカをしてきた主将に対し、「仲良くなれば相当深い友人になれる」と、思いを語っている。	今すぐ仲良くはなれないけど、主将の存在は自分にとってかけがえのないものと認めているエース。			

#### 4. 本時の学習

##### (1) 目標

友情の捉え方にも様々あることを理解し、心から信頼できる友人をより一層大切にしようとする道徳的心情を養う。

##### (2) 展開

学習活動【学習形態】	◇発問 ◆中心発問 △指示	○教師の手立て
1. 箱根駅伝についての印象を発表する。 【全体 5分】	◇箱根駅伝と言えばどのような印象をもっていますか。	○資料の内容を理解させるために、箱根駅伝について知っていることを共有させる。
2. 資料を読む。 【一斉 10分】	△主将の春日選手とエース川端選手の関係を感じ取りながら聞きなさい。  ◇この2人の関係をどう思いますか。 <予想される反応> ・大変そう ・面倒くさそう ・気まずい ・大事な関係性	○東海大学駅伝部の人間関係を整理するために、黒板に登場人物を掲示する。  ○2人の関係性により迫るために、2人の人物像を共有する。
3. 川端選手の思い描く友人像を考える。 【個 10分】	◇最後に川端選手は「深い友人になれる」と語っていますが、その気持ちは理解できますか。 <予想される反応> ・ずっとケンカしていたのに仲良くなれるのは理解できない ・ケンカできるほど本音が言えて仲が良いということ	○多くの考え方に触れさせるために数人に発表させ、自分事としても結びつけられるような発問を繰り返す。
4. 各々の友人の捉え方を交流させる。 【個→ 一斉 15分】	◆あなたは、友人と対立しても本音を伝えますか。それとも対立したくないですか。  △本時の振り返りを書きなさい。	○友人について考えを深めさせるために、2つの意見の賛否を問う発問を繰り返す。
5. 本時を振り返る。 【個 10分】		

##### (3) 評価とその方法

友人の捉え方も様々あることを理解しつつ、自分が心から信頼できる友人とはどのような存在なのか、友人と呼べる人に対し自分はどのような接し方をすべきなのかを考えようとする道徳的な心情が養われているかを、活動3、4の記述内容や発言から評価する。

## 5. 授業を終えて

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 登場人物の心情や考え方を理解しようとする中で、自分自身の友情に対する見方や考え方を見つめ直す機会となった。また、友人から見た自分はどのような存在なのか、自分はどのような存在でありたいのかを自問自答する時間となり、客観的な視点で自分自身を振り返ることに繋がった。

「友人」とはどのようなものかを考えると、色々な出来事やその時の率直な気持ちの時でも本当の自分の姿でいられることだと思った。人はその時の気持ちによって行動が大きく変わったり、相手に抱く感情が変わったりする生き物だと思う。だからこそ、思いやる気持ちや相手をほめる気持ち、正直に伝える勇気も必要だと思った。「深い友人」とはどういった存在なのか、日常生活を通して考えていきたい。

- 「自分だったら」という発問から自分事として考える時間を長めに設定し、異なる意見を多く交流させることで建前や理想だけではない本音に近いものを引き出すことができた。しかしそのためには、生徒の考えに沿いながらも発問を切り返していく教師のコーディネート力が必要不可欠となるため、予想される生徒の発言を多くイメージしておくことが重要となる。

・ありのままの自分をさらけ出せるのは家族以外にはないと思う。だから深い友人だとしても無理に話したくないことまですべて話す必要はないと思う。けれど、ダメなことはしっかり言ってあげることが互いのためでもあるので、時に対立することも必要。  
・本音を言い合えることは大切だと思うが、それで相手を傷つけてしまってはいい関係とは言えないと思う。互いを傷つけないように思いやれるのが深い友人だと考える。

「対立しても本音を言い合えることが深い友人である」と考えている人、「相手を不機嫌にさせるくらいなら、相手を思いやって合わせられることが深い友人である」と考える人、様々な「深い友人」の捉え方が意見交流の中から発言され、人それぞれ理想の友人像に違いがあるという他者理解にも繋げることができた。

- ▲教材にある友人関係と生徒の実生活における友人関係とのギャップが大きすぎて、登場人物の友人に対する心情や考え方に迫れた生徒は少ないように感じた。教材の内容は、同じ目標に向け全力で挑む高い志をもった友人関係であり、生徒が普段生活しているときに周りにいる友人関係とは求めるものが違いすぎるため、そこで登場人物の友人像を想像させることは難しい設定であったと考える。

「深い友人」と考えるととても難しいと感じました。川端選手は自分が思ったことを好き放題言えるから、気を遣わなくていい分仲良くなれると感じているのかもしれないが、自分が春日選手だったらあまり関わりたくないと思うかもしれない。でも同じチームメイトで、優勝するためには必要な存在なのだとしたら…難しい。

- ▲意見交流の時間を多く設けたことにより、自分の考えを早くまとめられる生徒は他者の発言に対し新たな視点から発言を繰り返し、考えを深めることができていた。しかし、じっくり自分の考えと向き合う時間がほしい生徒にとっては他者の考えを聞くだけで精一杯になってしまい、自分自身と向き合う時間があまり確保されなかったことが考えられる。また、意見交流の中で生まれた再思考を大切にするために、一度考えを整理する時間を設けることが必要であったと考える。どこかで再思考の時間を設けることで、自他の考えを照合し、自分なりの納得解を導くきっかけとなるのではないだろうか。